

いかにも賭場であつたことをうかがわせる姿が戦後まで残されて
いたが、風を防げる格好の場として一時開拓者宅地となつた。
しかし水のはけが悪いために住宅に不向きであり、他へ転居し
たため開田され、今はそのおもかげを止めない。

遂に最後の日が来た。しかし引き立てられるに当つても少しも
動じなかつたという。

雇人に命じて残つていた酒を全部流させた。
五尺桶から流れ出た酒はまるで川のようだつたと伝えられてい
る。

与一郎はその後帰ることはなかつた。

打ち首になつたと噂された。

与一郎には娘が一人いた。娘にはおどがめがなかつたが、余り

のできごとに世をはかなみ尼になつた。

相楽幸男さんの所にお寺があつたと伝えられているがその尼寺
でなかつたか。

付近には阿弥陀三尊仏やいろいろな供養碑が並んでいる。

一族に死産、早産が多かつたことから勧請したものであろうか。
腹の一部が開くようになつてゐるが、中を見れば罰があたると
か目がつぶれるなどと伝えられ見る者がない。

只一人親類筋の小栗山喜吉さん（庚申坂の東にあつた屋敷を払
つて須賀川に出て獸医を開業した人）が日露戦争に出征する際、
どうせ命がわからないのだからと、そつと見たという話があるが
無事帰還して長命した。

当人はどんなものがあつたとも、なかつたとも生涯誰にも語ら
なかつた。

この付近には寺があつたと伝えられ、旧杵衝村、長樂寺の門徒
である鶴称山淨土院養春寺であつたろうと想像される。

養春寺は天正元年（一五七二）宥伝法師が開基し延享四年

（一七四七）に廃寺となつた。

真言宗であり地蔵尊はつきもの、境外お堂としてまた小栗山家の
守り本尊として今日に至つたものである。

腹子地蔵因縁話

下大久保、通称寺作といわれる屋敷から南に、稻川（旧名志茂
川）の橋を渡り、長沼町木之崎字北作に通じる農道の左側の小高
い林の中に小さなお堂があつて地蔵尊が安置されている。

地蔵尊は腹子地蔵といわれ、生れ出るまでの腹子を守る地蔵と
伝えられている。

昔から、道を距てた小栗山さんが守護しているがその由来は明
らかでない。